

静中・静高 関東同窓会 会 報

静中・静高関東同窓会
 会報 第29号
 平成2年6月8日発行
 編集人 上 杉 重 吉

関東同窓会の十五年間を顧みて

副会長 奥 野 孝(53期)

関東同窓会が静中、静高同窓会の
 の広域支部として、発足してから
 早くも十五年目を迎えました。

私が関東同窓会にかかわりを持
 ちましたのは昭和五十年の春から
 で、突然静高の教諭をされていた
 鈴木殿夫君より同期の月見里君と
 私に連絡があり、昭和五十三年に

迫っている母校百年祭に備えて、
 同窓会の関東支部として正式に発
 足させるために協力して呉れとの
 事でした。当時私は同期の会には
 関係していましたが、同窓会に
 は何の繋りもありませんでしたの
 で、何が何やら詳細が分らないま
 まにお話を聞く為に、鈴木与平会
 長始め数名の先輩の方々とお会い
 致しました。

その結果百年祭も迫っているの
 で何とか具体的に、協力してくれ

との事で、私も当時幾つかの会合
 の御世話をしておりましたので、
 もう一つ新しい会合が増えるのか
 という程度の気持ちで、取り敢えず

準備事務活動を月見里君と共に
 引き受け致しましたが、がそもそも
 の始りでした。

早速会長には四十二期を中心と
 する諸先輩の方々の御意見により
 トッパンムーア株式会社の社長を
 されておりました宮澤次郎氏(42
 期)に無理に御願い致しまして御
 就任して頂きました。

扨て、発足させるからには、出
 来るだけ早い時期に総会を開催し
 ようと、春以来数回の準備会を重ね、
 五十三年六月三日、東京会館
 のロズルームで発足第一回総会
 を開催することに決定する迄に漕
 ぎ付けました。

その間、会場探し、特色づくり
 のための静岡の名産品コーナーの
 準備、あべ川餅、わさび漬、追分
 羊羹、黒はんぺんのおでん、フラ
 イ等を用意する為に車を馳せて静
 岡の各古舗廻りをした事も今は懐
 しい想い出です。

当初御引き受け致しました時は
 同窓生の連絡先も一千名前後との
 ことでしたが、その後どんどん増
 加し第一回総会の案内状は一九五
 〇通(現在三五〇〇通)となり、
 当日三六〇名が出席されました。

一応成功裡に発足し、百年祭に
 備える第一歩を踏み出すことが出
 来ましたが、これ一重に諸先輩、
 同窓生の方々の御協力のお蔭と感
 謝致しております。

私もホッとすると同時に、新し
 く任命されました副会長として、
 関東同窓会の整備、充実のため実
 務に従事しておりました処、五十
 二年九月定期検査で突然、前癌性
 胃潰瘍と診断され、直ちに入院手

術となりました。幸いに百年祭の
 行事には出席することが出来まし
 たが、その直後再発病状が悪化し
 翌年三月二回目の手術を致しまし
 た。その間死線をさまざつた時期も
 ありましたが、良く恢復し、今日
 元気で過しておる事が出来ますの
 は、それ迄病院のベッドに寝たこ
 とのなかった私にとって予想外の
 ことであります。

昨年十四年間の長きに亘り御指
 導を頂いておりました宮澤会長が
 引退されましたので、第二代会長
 として大石巖氏(53期、新日本証
 券相談役)に就任をお願い致し御
 引き受け頂きました。

関東同窓会は第二代会長を迎え
 一層の発展、充実を目指して、こ
 れからの時代を担う壮年、青年の
 同窓生の参加を得る為に努力致し
 ております。

十五年目を迎えた今日、発足当
 時のことが昨日のこの様に懐し
 く想い出されるのと共に、その間
 諸先輩、若き同窓生の方々から新
 しい友人を数多く得ることが出来
 ましたことを幸せに思います。

今年の五月で満七十才を迎える
 ことになりましたが、これからも
 宮澤前会長よりお教えを受けまし
 た「青春」の気概を持って生きて
 参る所存です。

その後の同窓会活動

(平成元年12月～2年5月)

◇新年顔合わせを兼ねた幹事会

1月26日(金) 18時～

新日本証券地下一階食堂

出席者：60名 会費：……3千円

・講演：谷川治弘氏(新日本証券調査センター、取締役)

「新年の株式相場展望」

◇役員会

2月26日(月) 18時30分～

新日本証券銀座社員クラブ

・大石会長ほか副会長等が出席して懸案事項を協議

◇幹事会

3月22日(木) 18時～

新日本証券地下一階食堂

出席者：40名

・平成2年度の総会開催について
 会報29号の原稿依頼 ほか

◇幹事会

5月10日(木) 18時～

新日本証券地下一階食堂

出席者：43名

・元年度事業報告、会計報告および
 二年度予算、行事計画の審議
 ・総会案内の発送のお願い ほか

事を好きにだけやっている。

(梅村)建設省関係で自然災害を減らす運動に参加。全世界で地震で死亡する人は年間三万五千人に及び、水による死亡の倍である。これを十年間に漸次減らす国際防災に力を入れ、進んだ日本の技術を、インドネシア・ペルー・メキシコに転移する一方、毎年三十人位の研修生の受入れをし、これは三十年続いて七千人に及んでいる。

(大庭富)呆けや半身不随にはなりたくない。周囲をみわたすと、忙しくやっている人は元氣のようだ。仕事と遊びを半々にし、遊びにもチャレンジ精神で、甚は二段、ゴルフは年間アベレージ九五を目指し頑張っている。

良寛自戒

一、言葉の多きこと
一、口の早きこと

一、人の物言いきらぬうち物言うこと
一、能く心得ぬことを人に教うること

一、学者くさい話
一、風雅くさい話
一、悟りくさい話
一、茶人くさい話

(永田 激)

五三期

五三期生古稀を祝う会

五三回同期会は予ての計画通り四月十四日伊豆長岡さくらや竹翠亭に於て本年度総会を行った。参会者三十五名、鈴木正久君・畔柳藤男君等久し振りの面々や夫人同伴(付添?)も三組あり盛会であった。

定刻六時、記念撮影後、清水四麻夫君の司会で今回の肝煎り中村孝次郎君が、一夜の宿に己往來者を語り古稀を祝おうと今回の趣旨を述べて開会の挨拶とし、又益田貞三君の計報等の消息、事務連絡を行った。次で今日を待たず先立つた諸兄の霊に黙禱。長谷川一郎君會計報告、仲野善二君監査報告の後、奥野孝君から益田君逝去の状況、木宮・宗像両君の著書出版等関東在住同級生の近況と、関東同窓会では級友大石巖君が会長に就任し、役員も若返った事等の報告があった。

乾杯の音頭は福岡から遠來の小嶋操、松永文夫両君がとり用意の梅酒でめでたく古稀を祝った。小嶋君から会名を「五三会」(午餐会?まさか誤算カイではなからう)とする様提案されたがこの件は後日に廻してお待兼ねの懇親宴に移った。

料理よし酒よし忽ちオラオマツチの仲間に帰る。遅れていた大石巖君がゴルフから駈付けて拍手が沸く。歓談尽くる所を知らずの経つ事を覚えずつの間に予定時間八時半となり校歌にて閉会。余情尚尽きず室に移って語る。中にはバーで二次会カラオケを楽しんだ諸兄姉もあった。

翌十五日は好天、窓を開ければ眼下を流れる狩野川一帯は新緑光り揚雲雀の声快く川面には白鷺輕鴨釣人の姿を見る。八時朝食、中村夫人の音頭で一同の健康と若さ(ビボーは?)を祈って乾杯、八時半水野君能狂言福の神の小話を以て別れの挨拶とし解散した。

参会者次の通り(敬称略)
大石巖、大石文雄(旧姓谷口)同夫人、奥野孝、勝又彰同夫人、川手貞一、木宮高彦、畔柳藤男、小嶋操、小宮佐一郎、佐野徳太郎、志田清、司馬速、清水四麻夫、清水知行、杉山滋夫、鈴木正久、芹沢五郎、宗三様、園田芳男、谷静夫、中村孝次郎同夫人、仲野善二、長坂光夫、長谷川一郎、福地誠也(旧姓曾根)、堀野高(旧姓伴野)、松永脩蔵、松永文夫(旧姓小田)、水野尚、望月芳郎、山菅章雄(旧姓村松)、月見里得知郎

(月見里得知郎)

追記。この会の幹事であり当日も元氣であった長谷川一郎君が会の三日後、十八日に動脈瘤破裂の為に急逝した。先年発病し緊急処置の結果一命を取留め、以後静養に努めつつ同期会の會計幹事を続けて呉れたのであったが今回が最後の別れの会になってしまった。

同君は在学中柔道部の主将、終戦復員後は製パン業を起して営々今日株式会社モンパルナス社長として幾多の公職を兼ねる誠実努力の人、まことに惜しみても余りある人材を失ったものである。

先の大戦に多くの犠牲者を出した我々は戦後幸にして友を失う事が少なかった。今、益田君・長谷川君と悲報相次いで至れば白居易の歎が身に沁みて覚えると共に古稀という言葉の重みを実感せざるを得ない。今後積極的健康増進に努めると共に、検診を怠らず早期診断早期処置によって竹馬の友の歎を無くそうではありませんか。53期益田貞三……平成二年二月二十七日胃癌の為、死去

五四期

篠原範平君・福津三朗君から転去の通知があった。新住所は名簿補遺訂正参照。

私儀、四月末日をもってフジタ

工業を退社致しました。

省みますと、海上自衛隊退職後新しい職場を得て入社してから十五年余り、その間、大過なく職務を遂行することを得、且又寮生研修生の皆さんと楽しく有意義な毎日を送ることが出来たことは偏に皆様方の御支援御協力のおかげと心から厚く御礼申し上げる次第でございます。

今後は日本緑化の一助をめざし微力をささげる所存でございますので、これからも一層の御支援御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

◇

篠原 範平

◇

私ども、このたび永らく住みなれた三鷹を離れ、高崎市の郊外にささやかな家を建て移り住むことにいたしましたのでご通知いたします。

この辺りは、遠くに、妙義、榛名、赤城の山々がのぞめ、近くには錦川の流れがある静かな住宅地で、澄み切った空気が格別かと存じます。

お近くへお出掛けの際はぜひ立ち寄りくださるようお願いしております。

福津 三朗

臨終の事を習ふて 後に佗事を習ふべし

日蓮聖人御書の妙法尼御前御返事に、人の寿命は無常也、出る氣は入る氣を待事なく、風の前の露尚聲にあらず、賢きも愚きも老たるも若も定め無き習也、されば先臨終の事を習ふて後に佗事を習ふべしと書き送っている。

思うに、ここで言う臨終の事は、葬式をどう塩梅するかとか、遺言書をなんと書き残すかとかを言うのではなくて、人間にとって一番大事なことの意味であらう。

では、人間にとって一番大事なこととは何かと言え、人間となつてこの世に生まれたのは何故かという事を知らなければならぬ。人間は多少の差はあれ、皆いくらかの善根功德といくらかの罪障を背負つて生まれて来ている。

(罪障がなくて善根功德だけの者は、既に菩提に到達しているから人間に生れることはない) 生まれて来たのは、この世で生老病死の憂患を受け罪障を消滅しながら、一方で波羅蜜を通じて善根功德を積み、菩提に近付くことができるから、生きることに意義があるのである。衆生即菩提なり、生死(生老病死)即涅槃なりというのはそのことを言っている。

では、どうしたら罪障を消滅し善根功德を積むことができるかといへば、日常生活で物事に処するに凡夫の知恵で判断するのはなくて、仏知見によって判断し行動実践することである。

では、仏知見はどうしたら得られるかと言へば、方便品に、諸仏世尊は衆生の誰でもが持っている仏知見の眼を開かしめ、示し、悟らしめ、仏知見の道(どう)に入ることを願つて世に出現したと述べて、法華経に依つて仏知見を得ることを教えているのである。

聖徳太子も法華義疏で、「夫れ妙法蓮華経とは、蓋し是れ総じて万善を取りて、合して一因とするの豊田、七百年の近寿、転じて長遠となるの神業なり」と述べている。であるから、妙法蓮華経に帰依することによって成仏し、その上で寿量品の心である「何を以てか衆生をして無上道に入り速に仏身を成就することを得せしめん」の教えに則つて、一切衆生を済度する使命があるのである。

後世の人達も題目の功德を「一たびも南無妙法蓮華経と唱へ奉れば即ち事の一念三千正観成就」と讃えている。日蓮聖人はこの題目の心を妙法尼御前に伝えたかったのであらうと思う(庵原倅次)

六四期

我々昭和五年生まれは、今年三月迄に六〇才の還暦を迎える。この六十年間は、前半戦争に明けくれ、半ばよりは敗戦で住む家も学ぶ校舎も焼かれ、戦後の復興に全力を投入し、ひたすら、働け働けの毎日で、やっと住む家を建て、子育てが終つたら定年退職でゆとりなど全然なかった。今にしておもえば良く頑張つたなあが実感である。

一月十一日山本光夫君が定年退職され記念パーティを、ホテル・ニュー神田で開催、塚本光彦、加藤満、八木綱三、竹内豊君が慰労に出席した。

四月十日、多摩カンツリー倶楽部で在京生ゴルフ大会を開催、猿谷秀雄君優勝、二位に一〇年振りで神谷武男君が入賞、腰痛で久方振出席の浅井幹夫君、杖をつきながら奮闘したがブービー。春うららの一日を、永田進一、村上喜代二、望月坦、渡辺素夫、野沢嶺で楽しんだ。

昭和二十五年、静岡城内高等学校(現静岡高校)を卒業した第十六期生の卒業四十周年記念同期会が四月十五日、静岡・長谷の静岡高校内、静岡同窓会館で行われた。六十六期初の試みで、地元在住者はもちろん、東京を中心とした関東各地を始め遠く札幌、神戸、大阪から同期生百十数人が出席、六人の恩師、同窓会副会長らも元気なお顔を見せ、式典、夜の懇親会とも盛大に、また華やかに行われた。

六六期

(野沢正憲)

記念同期会を開こう、という話を持ち上がったのは、昨年度元在住者で行っている年一回の同期会の席上だった。「来年は卒業四十周年、地元以外の者にも参加を呼び掛けようではないか」で始まり、さらに「どうせ聞くら、なにか記念になるものを作ろう」と話が進み、記念アルバム「旧友」の製作へと大掛かりなものとなった。

六十六期生は昭和十九年、長谷の木造校舎だった静岡中学に入學した。翌二十年空襲で校舎焼失、以後学舎は市内高松の住友金属青年学校、小鹿の三菱工場事務所、

駿府城跡内にある旧連隊兵舎へと転々と移動した。この間学制改革があり、静岡中学から静岡第一高等学校、静岡城内高等学校と校名が三度も変わり、長谷の校舎に戻ることもなく静岡中学通算六十六回、高校二回の卒業をしたのだった。中学高校時代を戦中から戦後にかけての激動期に過ごした。学ぶ校舎が焼けたほか教科書、学用品、食べ物がお粗末だったり不足したり、みじめな経験をした。逆にその思い出が強烈で、ご出席の各恩師のお話も「あんな小僧がこんなに立派になった」とおほめの言葉ががあったのは、長谷、高松、三菱、城内と移り、気の毒な諸君であった。「馬小屋の高松校舎、ガラス盗難防止で宿直した三菱。裸足でサッカーなど苦難な時代」「まづしい環境の中でハングリーの時代を経験してプラスになったのでは」「設備のなかった時代だった」などと当時を振り返るものが多かった。

当日は午後三時から同窓会館で記念式典。校歌斉唱、二十数人の同期物故者に対する黙とうの後、北川善平、村上春水、八十島実、湯原誠、渡辺福太郎各恩師を紹介(鈴木巖夫先生は懇親会にご出席)、石田校長、川村同窓会副会長から

祝辞と現況報告があった。地元準備実行委員会からは同期会開催にいたるまでの経過、八十三ページにおよぶ記念アルバム「旧友」製作についてのそれぞれ説明があった。また、関東、関西、名古屋地区の同期会幹事から日ごろの活動が報告された。また、出席者全員が一人ひとり拍手の中で紹介され、渡辺先生の音頭によって笛ピールで乾杯して式典を終わり、同窓会館前などで記念写真撮影を行った。

昭和二十年、校舎が戦災に遭ってから各地を転々とし、入学したこの地に帰ることはなかった。いま実に四十五年ぶりに懐かしい長谷の校舎に同期生が集まったのである。校舎、講堂、プールなどは昔の場所にあったが、当然のことながらずっとスマートになっている。校舎はもちろん鉄筋建て。走るとちょっとギンギンした戦災前の校舎とは比べものにならない明るいモダンな学舎であった。遠来の同期生の中には校舎を背景に写真を撮る者が何人かいた。

夜は浅間神社石鳥居近くの割ほう旅館「喜久屋」の大広間で懇親会を開いた。会場中央に置かれた一斗だるを駆け付けた鈴木先生、はるばる札幌から参加した植松皓

吉君らで鏡を抜き、マス酒で乾杯して「おしゃべり会」と銘打った懇親に入った。さすがの大広間も約百二十人の恩師、同期生、それにきれいだころも加わって埋め尽くされ、壮観ともいえる光景だった。宴が盛り上がるにつれ、恩師と杯を交わす人、旧友の席を回り歩く人、写真を撮る人と、一層にぎやかになった。

初の同期会出席者には昭和六、七年生まれが多く、ほとんどの人が来年は還暦を迎える。それぞれの職場で重鎮となって活躍している人、第二の職場に移った人、白髪の者、髪が薄くなった者、かなりはげあがった者、大きな病気に打ち勝った者。その人その人によって生きてきた道、環境は違いますが、みんなが同期会開催を喜び、四十年前に帰ったの談笑を重ねた。

なお、筆者は同期会会場に行く前、静岡城内高校があった現駿府公園を訪れてみた。入り口にはお城の一角を思わせる建物が出来、そのわきに旧三十四連隊跡地を示す石碑があった。われわれが運動場として利用した所は、きれいな公園中心部となり、家族連れ、若い男女の二人連れなどが静かに日曜日を楽しんでいた。学んだ旧兵舎の校舎、隣にあった城内中学の

校舎はむしろなかった。新しく徳川家康と戦没学生を悼むやすらぎの像の二つの大きな像が建っていた。立派なテニスコート、野球場も完備し、若やいだ声が弾んでいた。ここがかつてお城だったこと、兵舎だったことは伺い知れたが、一時期高校生、中学生が学び、スポーツに励んだことを示すものは見当らなかった。

回想・随感・近況など

断片的な

静岡の思い出

43期 三宅 静雄

私は人からよく「静岡の出身か」と聞かれるが、実はそうではない。生れて小学校を出るまでは岡山市で育った。中学校に切り換

わると大正十二年の春に、父の新しい任地静岡に、一家とともに移って来たのである。その後昭和六年に東京に引き上げたが、その間私は静岡と静岡(旧制)に学び、顧りみてのんびり過ぎた傾向が無くはないが、私にとって貴重な一時期を過ごしたのが静岡であった。少しく前、あるところから寄せら

◇ 同期会開催、記念アルバム製作についていろいろなご努力をいただいた清水仙一郎君を始めとする準備実行委員会の皆様方、また同期生で具合よく喜久屋の社長に就任していた永井益三郎君の懇親会へのお骨折りに、この紙上を借りて改めてお礼申し上げます。(石川制二)

れたアンケートに「好きな土地」という項目があり、私は「静岡。気候も人も温和な土地柄。富士山を近くに望む。青春時代を過ごした」と書き入れた。

小学生の時、私は岡山以外の世界を全く知らなかったから、静岡に移っているのと新鮮な印象を持った。わが一家が静岡に着いたのは、たぶん四月の一日の朝だったと思うが、その日早速静岡の繁華街はどこなかと出掛けて、浅間神社大祭の賑やかな山車の列にぶつかり、その優雅な華やかさに吃驚した。というのには岡山には浅間神社ほどに立派な神社がない上、質素というよりはむしろ野暮な趣

の祭しかやっていなかったからである。

夏になると、梅雨明けの頃からほとんど毎晩市中のどこからか花火の音が聞えてきた。これも禁慾的な岡山の夏にはないことであった。岡山では花火はたまにしか打ち上げないし、それほど美しくもなかった。静岡では夏にいくつか花火大会があったと思うが、七月中旬にわが家に比較的近い軍神坊周辺の空地で行われるのが大きかった。暗くなってから、それぞれ趣向をこらした多彩な花火が間断なく打ちあげられ、最後は二尺玉で締めくくられた。実は私は二尺玉などというものを静岡に来て初めて知った。夜が深まり十時をだいぶ回ったころ、それまでの炸裂音が俄かに静まりかえる。やがて鈍い音とともに、赤い小さな火がゆっくりとどこまでも昇り始め、ついに天頂に達した感じになって僅かに頭を下げる。その瞬間、大音響とともに大花輪が開く。観衆は満足して後は帰途につくばかりということになる。静岡は祭も花火も好む土地で、当時の地方都市としてはぜいたくの方であったであらう。

静岡は到るところ奇麗な清水が滾々として湧き出るところであっ

た。過去形を用いるのは、現在にたぶん違っているだろうと思うからである。お城の外堀にも水の湧口がいくつかあって、お堀は川の流水のように澄んでいた。そうして夏の夜には驚くばかりの多数の螢が群れて飛び、あるいは石垣の上で息づいていた。家の近くにある田圃道の草むらの中にも、螢の光がこぼれ落ちたように散らばり、浴衣に寄ってくるのを手で払わねばならぬほどであった。ただし、これらの螢は何故か、二、三年後、急速にどこからも姿をかき消した。

わが一家は鷹匠町三丁目に住み、東北側がもうここで家が切れていて、眼下から蓮畑が続く、清水山の小丘に至るまで人家はなかった。夏には朝早く蓮の白い花が開いた。またこの蓮畑に時折朝早くひな鳥を引き連れた水鶏（くいな）が現われた。くいなはかわせみ位の大きさの、しかし足はいくぶん長い小柄な水鳥で、数拍ずつ続ける鋭いスタッカート鳴声が戸を叩く音と形容されている鳥である。

この鷹匠町の家には水道が最後まで無かった。絶えることがない奇麗な湧き井戸があったからである。静岡は湧水が余りにも豊富で

あったため、水道の普及が若干遅れていた。

以上に思い起こした情況は、すべて私が静岡に初めて接した大正十二年（一九二二）の、今年から六十七年前の頃の事である。この年の九月一日には大地震の経験もあった。静岡も現在は万事情いろいろと変わったことであろう。

良き友に恵まれて

48期 中原 忠志

私達四八期生（約二百名）は昭和三年に入学した同期生です。

すでに半数以上が他界されたが、毎年四月八日に静岡で会合し、少年時代の旧友と昔日を語り合う喜びは吾々の楽しみとなっていた。静岡は文武の名門校とされ、学業では県下一の優秀校で、静岡市内からは勿論、県下から或は汽車通、或は寄宿舎生と秀才が多かった。又昭和三年秋には創立五十年記念祝典が行はれ、且つ昭和五年には昭和天皇が静岡県下巡視の際静岡へ行幸の光栄に接し、三年A組は原先生の英語の授業を天覧していただいた。

同期生の中で松平千秋君（京都大学名誉教授、言語学者）は特に優秀で、秀才で通じた。又後年官界、実業界、教育界で活躍する者

が続出し誇りに思っている。

運動では大正十五年に夏の甲子園で優勝し、同期の鈴木芳太郎君は入学した一年生の時から名投手として活躍した球界の名門校でもあり、静岡野球部の黄金時代でもあった。

この様な好環境下で少年時代を過ごした私は幾多の良き友に支えられ、教へられ育った。永い一生を通じてどうやら無事に過ぎたのも中学時代の友の御陰であると深く感謝する次第である。

友人の中で特に忘れられないのは加藤藤君（旧姓森）である。

加藤君は城内東小学校では級長で通じ、秀才であった。入学してからは水泳部に入り練習していたので勉強の方は少し落ちたが、明朗活潑、明るい性格で、いつもニコニコしていて、相手の立場に立って物を考へる人物であった。彼から受けた影響は大きいものであった。四年生の時は教室で私の前

が彼であったので話す機会も多かったが、水泳練習で勉強する時間が少なかったにもかかわらず英語は良く出来たが、代数が少し不得意で、お互いに助けあった記憶が今でも忘れられない。

四年英語の苦米地早苗先生の時間の始まる前に、彼は予習して来

なかったで当てられると訳せない、と言ってゐたが、案の定、当てられると悠々と立派に訳してゐた。

彼は慶応へ、私は早稲田へと進学した為疎遠になったが、彼は海軍航空士官としてハワイ空襲に参加し、戦後は日立に入り活躍し、子会社の社長をつとめた。

その彼から一年位前に世田谷から空気の良い湘南に移ったから遊びに来ないかと通知が来て、訪ねたいと思つてゐたのだが、つい延び延びしている中に、本年一月に亡くなった事を知らされ残念で仕方がない。老年になつたらやるべき事はすぐ実行する事が肝要である。同期の各位の健康と幸福を祝福してやまない。御元気で。

追悼 山本武君

55期 相川富士雄

本会報前々号に「鎮魂・戦死した友へ」を執筆した55期の山本武君が食道ガンで亡くなった。享年六十七。平成元年もあと数時間で終わるといふ12月31日夕刻のことであった。

同君は、昭和15年静岡中卒、早大に進み、学徒出陣、陸軍の水上特攻隊であった海上挺進戦隊の隊員として奄美大島の基地で出撃を待

っている間に終戦を迎えた。復員後東京都庁に入り、一時期は統率力と説得力のある労働組合の優れた指導者として、その後は明快な判断力と行動力を持った都庁の有能な幹部としての活躍、昭和53年地労委事務局長を最後に都庁を離れてからは都の外郭団体である東京都職業能力開発協会専務理事などの要職を歴任した。

同君は、静岡中学在学当時からブーさんと呼ばれて来た。卒業後ちょうど五十年になる今日までずっとブーさんで、われわれはそう呼ばないと実感が湧いて来ない。われわれは彼をブーさんと呼ぶことで彼に対する敬愛の情を表わしてきたのだと思つている。

55期の法月重雄、武井富夫、小生の三人は、ブーさんがようやく職を退いて悠々自適の生活に入つたのを機会に、「横浜会」と称して、随時横浜市中区の喫茶店別館馬車道十番館に集まり、そこで約二時間ほど彼を中心に歓談することになっていた。歓談といっても、ブーさんは知識、経験ともに豊かであるうえ、早大弁論部で鳴らした論客だったから、いつもわれわれは聞き手に回つて、ブーさんのご高話拝聴ということになりがちであった。この横浜会も今となつ

てはなつかしい思い出になってしまった。

年々歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず。大正に生まれ、痛恨の昭和を生きたわれわれは、平成に生きることが長ければ長いほど友人との悲しい別れを重ねて行くことだろう。そして、絶筆となった彼の文章の最後の部分に倣ったいい方をすれば、残されたわれわれが、ときどき戦死した学友やブーさんのことを思い出しながら残された日々をそれぞれの信念に従って生き続けることが、長年にわたるブーさんのわれわれへの友情に報いる道ではないかと思っている。

若さと好奇心

60期 満間 猛

六十才を過ぎたせいか、最近若さというものについて考えることがある。お世辞半分であっても、「若いですね。」と言われれば満更悪い気持ちはしない。同じ年令の人でも、年令相応に見える人もいるし、実際は六十台なのに、まるで四十台に見える人もいる。この違いはどこから来るのだろうか。肉体的には、生まれてから経過した時間は同じなのだから、人間を機械と考えれば、この差はメイン

テナンスの良し悪しの差なのかも知れない。しかし、そればかりが理由ではないような気がする。勿論それも大切なことには違いないが、若さに影響するもう一つの要素は「気の持ちよう」であるように思う。「気の持ちよう」は、言い換えれば「好奇心」と言って良いかもしれない。私自身が勝手に想像してみても、多分その方が若いのは好奇心のせいだろうと思われ方が大勢おられる。その一例として、井深ソニー名誉会長のお話をさせて頂こうと思う。

先日、ソニーの名誉会長の井深さんが文化功労者として顕彰されたのを祝う会が帝国ホテルで催されたが、私も出席させていただいた。発明協会とかボーイスカウト日本連盟、幼児開発協会等の会長や理事長をなさっておられるので、多様な方面の方々がお祝いに駆けつけられた。その際現在関心を持って取り組んでおられることを話された。一つはご承知の方も多い「幼児教育」であり、もう一つは人生の終わりにかかわること、即ち「ガンの早期発見」に関することだそうである。ガン細胞がどこかに発生して、医者が患者にガンであることをはっきり言えるようになるまでには七、八

年かかるので、初期の数年の段階で発見すれば、対処の可能性が増える。研究はそれをやる段階に来ており、今苦心しているのはそれをハード化するとどうだろうである。

校歌によせて

61期 相馬 孝

僕たち六十一期は、昭和の殆ど全時代に付き合った年代だ。小さい頃、呉服町や草深の街角にはまだ大正の「古き良き時代」の残りがあった。堀端には妖し気なカフェがあったし、長谷通り裏には蹠鉄屋があって、狭い路地には水の旗がぶら下がっていた。

静中に入る頃から、時代の空気は急速に冷えていった。それでもまだ野球の応援歌練習はあったし、校内でパンは売っていたし、旧校舎は木造ながら土足で入っていたのだから、当時としては随分ハイカラな校風だったと思う。事実、僕はこんなことにひどく感激し、自分が急に大人になったように感じて得意だった。始業終業の鐘の音、新しい教科書の上に窓から舞込む桜の花吹雪、校庭の端から端へいっばいに飛んだグライダー。まるで昨日今日のより鮮明に甦ってくるから不思議だ。

あれは二年の時だった。夏の水泳訓練で、まず最初が飛び込み台上段からの飛び降り。スパルタ式のS先生が鋭い目で下から睨んでいる。高さはせいぜい五米位だろ

うか。恥ずかしいながら、僕はその頃全く金槌だった。いや今でも同じだ。上った方がいいが、体が金縛りにあったようで動けない。湧き上がる皆の嘲笑の声に「もはやこれまで」ともうろうとして転げ落ちた。

結果はきまっている。滅茶苦茶にもがき「今度こそこれまで」と思った瞬間、体がスッと浮いて水に浮かんた。S先生が必死に水を蹴り、僕を抱き上げてくれたのだ。この時僕には先生が「金色に輝く竜神」のように思えた。

「大丈夫か、心配したぞ」という先生の顔は、これ迄見たこともないやさしい顔だった。

御蔭で学年中に格好の話題を提供してしまい、五十年程経った今でもこの話を出す人がいて、頭を掻いている。

僕たちはこの学窓から工場に学徒動員されていった。そして空襲で校舎は全て焼け、再び勉強に返ることはなかった。

最初の頃は、作業の合間に機械に挟まれて教科書を拡げて勉強したが、一日何回も空襲が重なるようになって、とても勉強どころではなくなった。食べる物も着る物も不自由、昼となく夜となくB29に追い回され、僕らの心はすさん

でいた。「桜なら散るのが覚悟」とあさはかな捨てばち気分に分かちをこまかに遊んでいた。

或る朝監督にきた国漢のU先生が朝礼の壇に立った。先生はその日、南の前線で学徒出陣兵が華々しく散ったニュースを述べたあと「君たち、人の命とは実に尊いものなのだ。だがその尊い命すら捧げねばならない時が人生にはある。だからこそ、自分の命を大切に、今、一日一日を充実させねばならないのだ」

僕はハッとして先生の顔をみた。先生の頬は紅潮していた。何と凛々とした輝かしい言葉ではな

いか。まさに生きた言葉だった。そのU先生が或る日、工場の原っぱで、I君と寝転んでいた僕の処にやってきた。警報発令中で、B29が次々と東へ白い尾を引きながら去っていった。当時僕たちはすでに静中を卒業し、旧制静高へ進学もきまっていたが、軍需生産維持のため、六月迄工場に残されていた。卒業生と恩師という、以前より気楽なものがお互にあった。「先生、不思議なことに今、物凄く勉強がしたいです」「あの校舎で、もう一度徒然草などを読みたい」「哲学入門を読んでも、さっぱり

わかりません」などと生意氣一杯な話を先生はニコニコして聞いていたが、フツとつぶやかれた。

「君、僕は自由主義者といわれているんだ」

当時、「自由主義者」とは「スパイ」と同様、国賊ものだった。

その時僕の頭の中には、今まで全く忘れられていた「真理」とか「価値」とか「自由」とか、戦後の日本が真剣に向き合うことになった言葉が、ふつふつと甦ってきた。僕は急に空に向けて、自分の心が広がっていくようだった。そして目の前の先生が、とても大きく見えたのだった。

戦後、僕は放送局に勤め、ずっと記者として働いた。

一日中ニュースの洪水に浸かり、一日が終わると、全て捨て去った。神様は「一日の苦勞は一日にて足れり」といっておられるそう。毎日がその繰返しだった。

アメリカの大統領が射殺された。日本の総理大臣が牢屋に入ったり、あつという間に東欧に民主主義が雪崩込んだりで、いまや世界に何が起きてても不思議はないし、何が起きてても驚かないと思うようになった。というのも、世の中の事象が右に左に大きく揺れ動いていても、人間の心や姿は一向

に変わっていないからだ。

校歌の三番に「文武の道を励めいざ」という言葉がある。文は主知主義だ。武は文を輔け、心を養うものだと思う。全人的な理想像を目指して努力しなさいということではないか。

静中にはこの全人教育の伝統があったと思う。あの凄まじい戦争の時代でも、S先生やU先生をはじめ大勢の先生が、人間を大切にする教育を受け継ぎ、伝統を護ってくれたと思う。

校歌を歌うとき、僕は岳南健児だったことを、しみじみ幸せに思う。

再度下野先生について

64期 渡辺 素夫

27号に「シモノはいずこ訂正補足」を掲載していただいたところ、先生を知る同期生・先輩諸氏多数よりお電話を頂戴し、「よくぞ書いて呉れた。中学生の時、反戦的なことを言う先生には、非国民や敗北主義者どころか、アメリカのスパイか国賊と思っていた。今になると恥ずかしい話だし、先生に

対し申し訳なさで一杯である。」「新聞・雑誌でシモノを取り上げ、先生を顕彰する方法はないのか。」「等々……。反響の大きさに驚いて

いる。揚句、「君は色々と昔のことを記憶している様だからこれ以外の先生の逸話を書け。」と乗せられ、更に28号でよもや拙文がお目に留まるとは思わなかった下野夫人がご健在で「涙してお礼を申し上げます」を拝見するに及び「豚もおだてれば木に登る」で先生について再度書くことにする。

(機関銃とトーチカ)

先生は授業の途中で次の様な話をされたことがある。

「君達は日本がドイツと同盟を結んでいることに安心し信頼もしている様だが、ドイツというのは仲々の曲者の国だぞ。支那事変(日中戦争)で日本軍が上海攻略で膨大と形容される様な戦死者を出したの、支那軍の使用した新銃のチェコ機関銃とトーチカ作戦だ。チェコ機関銃は、ドイツのチェコ兵器会社で製造された武器で、ドイツが支那に輸出販売したものだ。私の知人もこの機関銃で撃たれ戦死している……。」と。

昭和14年(一九三九年)ナチスドイツが戦車を先頭にポーランド侵略を開始して以来、その進撃は破竹の勢い。フランスを降伏させイギリスを本国に閉じ込めて連日のロンドン空襲。返す刀でソ連へも侵攻。「ヒットラーの電撃作戦」

の言葉とともに、私達当時の少年はもとより日本全国民は熱狂的に浮かれ、「この強いドイツという強い味方があるかぎり、米英恐るるにあらず」が、この時代の日本の朝野全体を覆っていた空気があり考え方であったから、先生の話は、日本のドイツ依存主義への痛烈な一撃であった。

更に先生は、「支那軍は、戦線の各所にトーチカというコンクリート製の小型円形陣地を築いて銃眼から機関銃を乱射してくるのだが、トーチカに使っているセメントは、三井物産が輸出している日本製品だ。日本の財閥会社は、国益より自社の利益を優先する」と驚くべきことを話された。ビックリ仰天、夕食時に親爺にこの話をすると、「ふーん。その話は本当だろう。だから三井は軍部に睨まれ軍需産業で儲けさせてもらえないのだ。現在、軍需で大儲けしているのは三菱と住友だ。しかし、その先生は生徒にその話をして大丈夫かな。ばれると特高警察が憲兵に検挙されるぞ」と真剣に心配していた。先生は、大東亜戦争と呼んでいた日中戦争・太平洋戦争を帝国主義戦争であるという事実と、資本主義の恐ろしいカラクリを生徒に教えようとしたのである。

(機あれども機なきを如何せん)

先生は戦局が不利で日本軍が大苦戦している状況を、或る大本営参謀が語った「吾に機あれども機なきを如何せん」という言葉で私達に紹介した。「敵機動部隊を迎撃する機会は沢山あるのに、これを攻撃する飛行機が我が軍にはないので、どうする事も出来ないという意味だ。」と先生は説明した。一年一組二期の授業中のことであるが、その時である。「先生、質問します」と、望月昌也君ことバーク(元東大宇宙航研部長)が立ち上った。「バークが沢山あるのにどうして飛行機がないのですか。よく分りません」望月バーク君は、バークを機械(マシン)と勘違いしているのである。先生「バーク、英語で言うとかかります。誰か言える人いますか。」松下一雄君(元第一勧銀柴又支店長)が起立して「チャンスと言います。」望月バーク君「ああ、それなら理解出来ます……。」

こうして書いてみると、紅顔の中学一年生時代が懐かしい。秋の同期会でこの話をして、松下君に「憶えている。」と聞いたたら、「全然記憶していない」とのことであった。一方、望月バーク君は、昭和23年夏、それまでの「全国中等学校野

球大会」が学制改革により「全国新制高等学校野球大会」と改称され、静岡中学校も静岡第一高等学校の校名で出場したが、その時アメリカ占領軍静岡地区司令官の通訳として登場した。当時日本占領の米軍は、日本人が多数集会することを禁止し、なんでも届出許可制であり、この野球大会も「進駐軍のご好意」で開催された訳だが、望月君は旧制静岡高校理科二年在籍中の身でありながら、その語学力を買われ司令官の開会の辞を流暢且つ明確に満員の見物客に通訳し万雷の拍手を浴びた。スタンドに坐っていた私は「俺は薄ぼんやりとこれから野球を見物しようとしているのに、同じ中学の同期生でこうしてこんなに違うものなのか。」と劣等感に駆られたことを覚えてる。

話は脱線したが、先生のこの「機あれども機なし」は「不肖シモノは、大元帥陛下の命により……。」と27号に紹介した言葉とともに、先生を伝える二大句(フレーズ)でないかと思う。

ともあれ、27号で書いた様に先生が、日本と静中の運命を予言した先生の先見性の優秀さと、為政者の間違いや軍国主義国家主義の恐ろしさを教えた根本思想や観念

は、どこから生じたものであろうか。科学的社会主義者(マルキシスト)か西田哲学の信奉者であったのか、或いは社会改良主義や自由主義を唱えた河合栄治郎の崇拜者であったのか、先生が亡くなっている現在、確かめる手段はない。現在教職にある人で、日中戦争太平洋戦争を侵略戦争とか帝国主義戦争と教えている教師はゴマンといふ。しかし、「教育勅諭」「軍人勅諭」「宣戦の大詔」等で骨髄まで聖戦と信じ、「一千万乗の大君のために死ぬことは、かえりももせじ」と思っていた当時の日本人の観念思想の中で、先生の様に真理を愛し、科学的な世界観社会観を持つ、グローバルなものが見方が出来て、且つ勇氣を持って教えた人は稀有な偉人と言っても過言ではない。当時の日本人がどんな考え方をしていたかについて面白い話がある。サイパン島で日本軍が玉砕(全滅)を戦時中こう言った)後、日本列島は連日の様に米機B29の空襲を受け、静中でも「敵機来襲 待避」の号令で、生徒は防空壕に避難し、やがて、「氣をつけて下校せよ、」となり、授業どころではなくなったが、その頃の話である。西洋史の教師板橋ヌルハチが「不二高女(現在の

静岡雙葉学園)のあるキリスト教会の尖塔から空襲のたびに敵機に信号を送っている。いまだ、あの学校は当局からとり潰される」と授業中にシャベリ、さすがその時は、生徒から冷笑されたことがある。当時の旧制中学校の教師でしかも西洋史の先生がこの程度の考え方しか出来なかったのであるから、あとの日本人は推して知るべしである。この板橋ヌルハチは皮肉にも下野夫人の女学校時代の恩師であると、先日上杉先輩からお聞きしたので、実名で記すことは夫人を傷つけると危惧の念もあるが、下野先生の偉大さを皆様に理解してもらうために敢えて実名で記述することにする。

先生は背が小柄でしたが、その思想・観念・生き方は大巨人であった。「先生が生きているならば会って話を聞きたい」「64期の同期会で先生について徹底的討論をしたい」という鈴木君の十年來の念願が投稿になって現われ、私の補足訂正を生み、同期生先輩諸氏の先生への追想思慕敬愛の念の輪を生んだのである。そして驚くべきは、下野夫人は名古屋でご健在であるが、この夫人と戦後もずっと交信を怠らず、時にはお会いしてもいるという上杉先輩の存在

と、夫人との美しい人間関係を聞くに及んで、私の感激はひとしおである。

下野夫人とお嬢様は、若くしてシベリアの凍土で亡くなった先生の分まで長生きして下さい。貴女様方のご主人、お父上は、大巨人であつたという誇りを持って生きて下さい。お願いします。

還暦を前にして

64期 塚本 光彦

桜咲く四月、憧れの静中の校門をくぐって以来、早いもので四七年になります。私達六四期は、本年度が丁度還暦、サラリーマンには、停年を迎える意義深い年になります。

私共は、生れた翌年が満州事変、小学校入学が支那事変、小学校五年が大平洋戦争、そして終戦が中学三年と、正に昭和の激動期、酷しい時代の連続でした。しかしながら、中学三年以降、平和な民主主義に則る学生生活を送り得たことは何よりの幸いでした。戦前の雰囲気を知っていて、戦中、戦後を過して来た世代です。特に戦後、何も無くなった時代から、高度成長期を脇見せず、ただ馬車馬の様に仕事をし、日本を世界一の経済大国たらしめた感があります。

振り返ると、入学当時英語の山下先生（流線）の口癖「桜咲く四月、憧れの校門をくぐって、早……」。一年の夏頃の夜行軍、当時は公害・環境汚染も無い、実に美しい星の輝く夜空に、時々流れる流れ星、疲れを癒すのに充分でした。十一月三日の運動会。特に各部夫々のユニホーム姿での対抗リレー。戦後、新聞紙の様な、お粗末な教科書ながら、充実した授業。とりわけ、昭和天皇をお迎えしての天覧授業、高原先生（鰻頭）の数学の授業でした。石だらけのグラウンドで、手製のバット・グローブ・ボールで興じた草野球。楽しい忘れ得ぬ思い出です。

反面、授業を農村に軍需工場への勤労奉仕、軍需工場での米軍戦闘機に依る機銃掃射、飛行帽を付けた操縦士が鬼の様な顔して肉迫し、伏せた体の直前を砂煙をたてて炸裂した銃弾。米軍の上陸を思はせる様な照明弾下の艦砲射撃。静岡大空襲での校舎被災。正に悲惨な戦争体験です。現在の平和な時代の有難さ、尊さを痛感します。悲しいかな、肉体の衰えは年と共に増え、特に五十才を越える頃より著しく感じられます。運動不足からくるスタミナ低下が大きな原因です。同じ住宅地に住む同期

の酒井三男君と共に近くのゴルフ場、スポーツクラブのメンバーになり、ゴルフは月二回位、スポーツクラブは週二回位通い、運動不足の解消に努めています。スポーツクラブでは、インストラクターの指導のもと、ストレッチ体操、ウエイトトレーニング、エアロビクス（水泳・サイクリング・リズム体操等）に励んでいます。入会当時（三年前）は、自由型で百五十米泳ぐのが精一杯でしたが、今では、休まずに千米泳ぐのが日課です。無理をせず、ゆっくり（約四十分）マイペースで楽しく泳いでいます。昨年六月の専門医の診断は体力が五四才、体型が五八才、総合バイオフィットネス年齢が五六才でした。三年間の体力作り効果と喜んでおります。

私は、来年一月末で三十七年間勤務したモービル石油株式会社を今年退職します。一九八八年のゆとり度日本一の会社に勤務出来たことを感謝し誇りに思っています。社会人として、会社を通して学んだことが自然と私生活にも影響し、今日の私自身がある様に思います。従って、先輩、同僚、隣人に対し感謝の気持ち一杯です。

今や、人生八十年と云われ、第二の人生の門出に当って、友人、

隣人を大切にし、生きがいを趣味に求めたいと思います。幸にして住いが古都鎌倉にあり、鎌倉の歴史を生きた教育とし、散策し、庭仕事、水泳、ゴルフをバランスよく保って、体力維持に努め、三十余年苦楽を共に分ち合った妻と共に良き地域の住人として、楽しく、心のゆとりを持って長生きしたいと思えます。最後に六四期の皆様のご健勝と母校の発展を心より祈り上げます。

「早春賦」と「静高校歌」と「背くらべ」

64期 新井 彰

先日、会報と一緒に届いた関東同窓会の会員名簿の第一頁を見ておやっと思いました。

そこには、校歌が楽譜と共に載っていて、今まで静高校歌の作詞作曲者が誰であるか気にも止めていませんでしたが、ふと作詞者名に目がとまり、そこに吉丸一昌とあったからです。

吉丸一昌といえば「早春賦」の作詞者です。寒さの残る春のまだ浅い頃、ラジオ・テレビからよく流れてくる「春は名みの、風の寒さや、谷のうぐいす歌は思えど、時にあらずと声も立てず……」のあの歌です。

吉丸一昌という名前を、どうして私が記憶していたかというのと、以前NHKのFMで放送された春の歌の特集を、カセットにたまたま録音していて、アナウンサーの「作詞吉丸一昌、作曲中田章、真理ヨシコさんが歌います……」という前置きを何回か聞いていたからです。

岩波文庫の日本唱歌集（堀内敬三・井上武士編）の解説によると、吉丸一昌は、「早春賦」のほか、「故郷を離るる歌」「おたまじゃくし」「木の葉」などの作詞者でもあり、明治の終り頃から大正の初めにかけて、文部省の尋常小唱歌の作詞の部門の編集委員であったとあります。

ちなみに、静高校歌の作曲者の方の島崎赤太郎も、同じく尋常小唱歌の作曲の部門の編集委員であったとあります。そして、両氏とも東京音楽学校教授でした。

静岡中学は、当時の日本の、音楽界の最高レベルの両氏に校歌の作詞作曲を委嘱したということであつたと想像されます。

それにしても、私達の校歌の作詞者が「早春賦」のひとつであつたというのは、私にとって（私にとつただけかも知れませんが）、ちょっとした発見でした。

戦後は、校歌としては、歌詞の一番だけが歌われているわけですが、一番だけでも時代を超えて通用する歌詞となつていたことで、吉丸一昌さんも、あの世でほっとしておられることだろうと思うのです。

「……理想は高し富士の山、八面玲瓏白雪の、清きは我等の心なり……」

ところで、この富士山が出てくる唱歌に「背くらべ」があります。「柱のきずは、おとしの五月五日の背くらべ……で始まり」、二番は、「柱にもたれりやすく見える遠いお山も背くらべ、雲の上まで顔だして、てんでに背伸びしていても、雪の帽子をぬいでさえ、一はやつぱり富士の山」となります。

この二番について私はふと思ひました。背くらべをしながら、家の外を見渡して富士山が見える所は全国でも限られている。富士山の見えない全国の大部分の地方の子供達は、この歌を実感をもって歌うのだからと。

まあ、富士山の見える情景を想像すれば充分なのだから、そんなことは余計な心配か。

いや、まてよ、そういうことよりも、ひよつとすると、この歌の

作者自身が、私達のように富士山の見える所に育った人、——静岡あたりの出身の人ということではないだろうか。

という私の推理は、びたりの中しました。いつか新聞に、この歌のことだったか、この歌の作詞者海野厚さんのことが載っていて、静岡の、たしか清水近くの出身とあったのです。

海野厚さんが、さらに、静岡・静岡の同窓生であるということになると、この話はもっと面白くなるのですが、手もとに卒業生全員の名簿がないし、まだ調べることまでしておりません。

◇ ◇

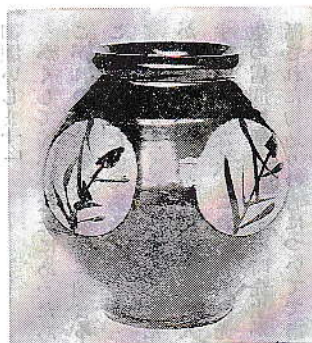
△付記▽三月七日の朝日新聞に、作詞者が不明だった小学唱歌「日の丸の旗」や「桃太郎」「かたつむり」も、吉丸一昌（かずまさ）氏の作詞である大きく記載されていた。これは大分の研究家吉田稔氏が、吉丸氏の親族が所蔵していた論文の下書きから発見、そして発表したものである。文部省にも再度、資料の掘り起こしを求めるといふ。

因みに、吉丸氏は大分県臼杵市出身で、大正五年三月、四十三歳で逝去。
(上杉記)

「正しさ」の追求

陶芸家浜田庄司さんの想い出

67期 中村 次雄



昔の話で恐縮である。益子焼で有名な浜田庄司さんの赤絵壺に魅入って、高島屋の美術品コーナーにまる一年間通いつめたのは、もう二昔も前のことである。

かつてある人に「人の興味は年とともに変わって行く。多少の違いはあるが、子供の頃の動物にはじまり、植物へ、そして動物へと移ります」と聞かされた言葉が妙に私の頭の中にあって、このためか陶芸展やデパートの美術品コーナーの近くへ行っても「俺はまだ陶器を楽しむほど年とはってはいないぞ」などと思いつながら通り過ぎることが多かった。

しかしある日、迷ったように足を踏み入れた美術品コーナーで、茶器や壺、絵皿などをチラチラと

横目づかいで眺めながら通り過ぎようとした時、一つの小さな壺が私の心を強く引きつけ足を止めた。その壺は高さ二〇センチほど、一番ふくらんだ部分の径が二〇センチ弱、そのふくらんだ部分に丸が三つ色を抜いて描かれ、その中に鮮やかな朱と緑で「いぬたで」と思われる草花が力強いタッチで描かれていた。

私が美術品コーナーの作品にあまり心を引かれなかった理由はほかにあった。それは高度なテクニクだけに終ってしまっている作品が多かったこと、逆に骨格ができ上がっていないのに故意に変形などをさせ、おもしろさを表面的に追っただけの作品が多かったためであった。しかしこの作品は、伝統的な表現技術や様式にあまり拘束されず、また、これは芸術作品だぞ、といった気負ったところもなく、素朴で一見泥くささを感じさせるものであった。そしてこの壺の横に「柿柿赤絵丸紋花瓶」浜田庄司作とあり、ああ、これがあの有名な人間国宝であり文化勲章を受章された陶芸家浜田先生の作品か、と合点したようなわけであった。

その日、家へ帰ってから赤絵壺の影は脳裏から去らず、私はつぎの土曜日もまた美術品売場のショーケースの前に立っていた。そしてつぎの週末、またつぎの週末私は何かにとりつかれたように出かけて行った。

かくて私の美術品コーナー通いはじまり、これがなんと翌年の秋まで一年以上も続くことになったのである。

赤絵壺 欲しいと思えど 赤絵壺 余りに遠し せめて 新しき月のはじめに ガラス越し 君と語らん などとつまらぬかえりたなどを作って、じつと眺めていたのもこのころであった。

三月、四月と通い五月目のはじめの土曜日、会社がひけると例のように美術品売場へ直行した。と驚いたことに、一人の客がその壺を手にして店員と何やら話をしていてではないか。私は一瞬どきんとし「もう赤絵壺を見るのもこれで最後か」と急に切ない淋しさにおそわれ、その壺が客の手に渡されるのを見るに忍びなく、そのまますぐに店を後にした。そして、つぎの週末、つぎのつぎの週末も行ってもう無駄だとあきらめた。

こんな気持になるのであれば無理してでも買ってあげよかっと思った。しかし考えてみればそれは私の手のとどかない遠い存在であった。

しかし、もしかするとまだあるかもしれない。なくなつたということを確認したわけではないのだからもう一度行って確かめよう、なかつたら今度はあきらめられるだろう、という気持になった。私は半ばあきらめ、不安な気持でデパートへ出かけた。

「あった！」壺はそのまま前と同じショーケースの中に納まっていた。そのふくらとした赤絵壺は以前にもまして温かさと、やさしさ、そして素朴な美しさを発散させていた。

再び私のデパート通いはじまった。今度は貯められるものであれば貯めて、赤絵壺を自分のものにしようとした。こうして私が赤絵壺と出会ってからちょうど一年目の秋がめぐってきた。しかし立てた目標にはほど遠く、入手はとて無理だった。私は残念ではあったが、ついにあきらめることにした。そのかわり、益子にのすばらしい壺をつくった浜田先生を尋ねようと考えた。幸い小村君という益子に近い小山市に住む友人の骨折りによって先生に会えることになり、紅葉のはじまった益子に会社の同僚と連れ立って出か

けた。

小村君はあらかじめ浜田先生の奥さんの方に話をしておいたように、先生には奥さんから紹介された。

その時、思ってもいなかった事を奥さんが口にされた。「あなた、この人はあなたの赤絵の壺が好きなんですって。それを見るために一年間もデパートに通ったんだそうですよ」私はとっさに、あ、小村君が話をしたんだなと思った。

「なに、そうすると僕の壺は一年間も売れなかったんだね」と私の顔をのぞき込むように先生は笑いがらおっしゃった。私は、とんだ話になってしまった。先生に大変失礼なことになってしまったではないか、と困惑し赤面した。しかし先生はそれを別に気に留めた様子もなく、話を続けられた。

「今日はちょうど良い時に来た。今から窯を開けるから好きなものがあれば一つ選びなさい」先生はすまの西の横手につくられた、登り窯の方へ足を運ばれながらそうおっしゃった。

私の胸は急に高鳴った。「先生本当に譲っていただけるんですか」といったかったが、つまって言葉にならなかった。

しかし先生はそうおっしゃるが

私などに手が出せるような壺ではない。そのため、せめて先生にお会いするだけでもと思い今日来たんじゃないか、と自問自答し、だろこんな機会は二度とないだろうし、先生に選びなさいといわれ引込んでしまつては男ではない、とも思った。

しかし……しかし……と何度も考え、私は登り窯から次々と出されてくる壺や花びん、絵皿を心ここにあらずといった気持ちで眺めていた。

と、出されてきた作品の中に私は赤絵壺を見出した。それはデパートで見たものとはとんと変らないあの赤絵壺であった。私の心は決まった。もう金額のことなどどうでも良かった。「先生この壺を御願ひします」

かくして遙かなたにあつたあこがれの赤絵壺は私の手に納まることになったのである。

前置きが長くなってしまったが、私のいいたかったのは壺の入手経過ではなく、これからあと先生の居間に通され、その時先生が話された物造りの心についてである。

いろいろ話された中で今でも鮮明に覚えてゐるのは、「物造りで大切なこと、そして物に大切なこ

とは「正しさ」です。正しさを追求することです」という言葉であつた。この言葉に、私は物造り一途に七十年生きてこられた先生の人生の重みを感じた。

先生は、この「正しさ」の意味を、それが何を指しているのか具体的にいわれなかった。しかし先生が世界各地で集められた民芸品の数々を示されながら、正しさがなければこれらの作品はもうとくに消えてしまつていただろう。

これらの中には千年以上も前に造られたものもあるが、これらがいまだに生々と私たちに訴えることができるのは、これを造つた人たちに、正しい心、正しさを追求する心があつたからだ、と熱くぼくいわれた言葉から推して、先生がいわれる「正しさ」とは、まず物を造る作家の心の問題であり、かつまた使い勝手からくる正しい機能追求であり、これらが一つの作品に結果し生かされた時、

はじめて優れたものが生まれ、それは同時代のみならず、時代を越え、使う人、見る人に訴えることができる。このような意味合いであつたろうと思つてゐる。

私は先生の言葉を聴いていて、だんだん自分が抱いていた自信が薄れ、恥かしくなつてきた。これ

まで私は数多くの製品デザインを手がけてきた。しかし、その中に先生のいわれるような製品がいったい何点ぐらいあつただろうか。いや、一点もなかったかも知れない。では、これから造れるだろうか、いや造れないかも知れない。これから造るために俺はいい何をすればいいんだ。

先生の「正しさ」という言葉がそれからの私に重く重くのしかかつてきた。先生の作家としての信条は、人間が物を造ろうとした場合すべてについてあてはめることができる。

正しい物を造ろうという気持ち、これが根底になれば良い物は生まれないだろうし、ましてや人の心を打つような作品はできないだろう。私はここへきて、私をとりこにした赤絵壺のあの魅力の原因は、何であろうこの「正しさ」にあつたのだと合点した。

先生は「正しさ」を土という素材を用い、日常使うごく普通の壺や花器、茶器や皿などの中でこれを追求し、永遠の美の世界にまで高められたのであつた。

私は今、部屋に置かれた赤絵壺を眺めながら、ありし日の先生の姿を想ひ浮かべるとともに、「物造りで大切なことは正しさです」といわれた先生のことばを、きのうのように思い出すのである。

(寄稿者略歴)

東京芸大卒。積水化学工業場で、33年間プラスチック成形品のデザインを手掛け、積水化学工業デザインセンター所長として活躍。現在は、千葉工業大学・工業デザイン学科教授。

老人性痴呆に備えて

68期 大川 庄治

最近、老人性痴呆についての特別番組がテレビでしきりに放映されるようになった。これは日本が高齢化社会に向つて猛スピードで進んでいるため、その結果として寝たきり老人や、ひとり暮らしの老人とともに、老人性痴呆に罹つた老人がふえてきたからにはかならない。

私の父も脳血管性痴呆となり最後には自分の息子や娘も判別できないままこの世を去つた。同居の義父も義母もまた寝たきりのあとボケて亡くなった。

私が老人問題、特に老人性痴呆に関心をもつようになったのは、会社で人事、労務、厚生関係を担当し、仕事の上で老人問題について勉強する機会が多かつたことにもよるが、やはり身内にボケ老人

を何人も抱えていて、老人介護の難かしさを実感として味わってきたからである。

現在、痴呆症老人の数はおよそ七十五万人、十五年後には倍増するという。今後、高齢化に拍車がかかれば、八十五才以上の高齢者のうち四人に一人はボケ老人になる可能性ありとのショッキングな報告もある。私の知る限りでは、ボケ老人を抱えている家庭は悲惨そのもので、直接の介護者が疲労困憊して倒れてしまふばかりか、家族全員が絶望のどん底に陥ってしまうなど、家庭の崩壊につながってゆく例が極めて多い。

老は誰にでも訪れるものだし、程度の差こそあれ老人はみなボケてしまふのだといって、手を拱ねているだけで果してそれでよいのだろうか。少なくとも同居の家族に迷惑をかけないだけの自助努力が必要ではないかと考えている。

そこでボケを防止するにはどうしたらよいかが差し当って問題となるが、誰に聞いても、それは頭を使うには読書が一番よいといわれるが、漫然と活字を追っていただけではさほど効果があるまい。読みながら考えることが肝

腎だろう。私事で恐縮だが、本を讀むにしても何か目的がないと張り合いがないと本年初め簡単な資格(国家試験)を取得した。数年前、欲張って難関の某国家試験に挑戦したが、勉強不足(能力不足もある)でこれは見事に失敗した。勤めを辞めたら再度頑張ることにしている。

次に、足の方だが、私はよく歩く。タクシーには、殆んど乗らない。歩き過ぎると、足の指先がむれ、折角治りかけた水虫が再発しそうなには閉口するが、毎日一万歩は歩くように心懸けている。出張したときには内地であれ外地であれ、地図を片手に歩き回るので、出張先での印象が鮮明に残っている。

さて、昨年一月から社交ダンスを始めた。同期(六八期)の荒谷じつ子さんご夫妻がダンスの無料講習をされ、私にもお声がかかったのを機会に、以後殆んど休むことなくレッスンを受けている。二時間半のレッスンで三〇〇〇歩から四〇〇〇歩は歩く。社交ダンスは、いま静かなブームを呼んでおり、趣味と実益を兼ねているほか、何よりもストレスの解消にもなる。男性会員には、大蔵省の元高官、大病院の院長、英語や書道の

先生、八百屋のオジサン、女性会員には主婦、OL、看護婦さん、お師匠さんありで、いろいろな職業の人達と知り合いになれる。六十期の上杉さんも通っておられた。日本は、経済大国のわりには老人問題についての国の対策が立ち遅れている。痴呆性老人についてこれ程社会の注目を集めているのに、患者とその家族のための医療対策・社会福祉対策の整備充実が不十分である。従って国に対し、高齢化社会を迎えるに当って最重要課題として一刻も早く取組むことを望む次第である。

北の港から

70期 北村 孝

小樽は坂の街です。ほとんど平地は無く、神戸のような港町ですが、神戸と異なり言わば鄙びた過去の街と言った所です。

明治の末から大正・昭和の初めにかけて北海道の玄関として栄え、樺太との交易や石炭の移出港として一時は二十数万人の人口を誇っており、日本銀行支店をはじめいろんな金融機関の出先が軒を連ね、北のウォール街と言われた一角もあったそうですが、今では人口も十七万足らずとなり札幌の

新しい衛星都市になり下がっている。

ます。

生まれて初めて北海道での生活も一年が過ぎましたが、南国育ちの小生と家内が如何に当地について無知であつたか思い知らされました。

先ず、メロン、ぶどう、西瓜など北海道ものがあることは東京に居た頃でも知っていましたが、それらはいずれも全て温室で育てられるものだと思っており、露地物であるとは知りませんでした。

また、青大将や蝦が当地にも居ると言う話にびっくりしました。もっとも、直射日光は結構強く、夏は朝の三時頃から東の空が明る

み、日中は三十度近くまで気温が上がり、夕方は八時過ぎまで陽が沈まないことから考えれば何も不思議ではないのですが……。

でも、昨年の四月に赴任して来たときは路地裏には雪が残っており、五月半ばの花見のときにはセーターを着込んでジャンパーを羽織っても震え上がるほどの寒さでしたし、家では六月までストーブを焚いていました。

メロンとか西瓜などは五月ぎりぎりまでビニールハウスで育ててから移植するのかもしれない。

小生の事務室は、港で一番大きな建物である合同庁舎の五階な

で石狩湾を一望することができす。北海道を知らない人には位置関係が分からないと思いますが、北海道は全体が菱形をしており、その上端が稚内の宗谷岬、下端が襟裳岬とすれば小樽は左端の少し上の石狩湾に面しています。

港の防波堤の向うの海は右側の湾奥部を緩やかに湾曲し、やがて対岸の増毛連山の底辺を形成しています。対岸が晴れてその連峰が斜陽に輝き、手前の小樽が厚い雲に掩われて暗いときなど、スポットライトを浴びた遠景は恰もクルールの海景を見るようで暫し仕事を忘れさせます。

余談ですが当地は絵の好きな人が多いようで街角でキャンバスを立てている人をよく見かけます。小生の如き素人でも坂を登っていきスケッチを試みたくなる家によく出会います。それは赤や青の傾斜したトタン屋根と煙突がある所為だと思えます。海を描くときに船のマストや灯台が縦の線として構図のアクセントになるように、煙突のある家は絵になります。

小樽は坂の街と言いましたが、この街で道に迷うことはありません。何故なら坂を下れば必ず港に出るからです。また、自転車は全く使い物にならず私達の持つて来

た自転車も物置に入れたままです。

北海道では町おこしや村おこし運動が盛んで、御多分に漏れず当地でも「歴史とロマンの街・小樽」のキャッチフレーズで観光立地に力を入れており、とくに小樽運河と寿司は予想以上の当たりようです。土地の人も驚いています。

小樽運河は、そもそも今では使われなくなったドブを埋め立ててバイパス道路を作ろうとしたところ、何とか言う絵描きさんが反対し、これが大きな市民運動となつて有名になったのですが、今では市の予算で手が加えられセーヌの河畔よろしく石畳と街灯で観光名所となっています。また、寿司はグルメブームに乗って新鮮なネタと安い値段が口コミで広がり、寿司屋通りと称する所に数軒の店が軒を連ね、昼休みなどには観光バスの客で一杯です。

私達も来た当初は、評判の店を食へ歩きましたが、確かにネタは新鮮でポリウムもあります。しかし、値段の方は松竹梅のセット料金が二千円から四千円と決して安くはありません。でも、東京では五千円から一万円はするのではないかと思われる内容です。申し訳ありませんが、最近では寿司に

食傷気味でカニ・ウニ・シャコなどうんざりです。

そのほか小樽にはガラス細工を集めてこれ売り物にした店も多く、若いギャルの人気を集めていますし、また古今東西のオルゴールを陳列したオルゴール館なる店もあります。

日本銀行支店の古い石造りの建物をはじめ、戦災に遭つた内地ではあまりお目に掛かれない珍しい情緒ある建物が所々にあり、その主なものには夜になるとライトアップしてムードを盛り上げています。

夜の小樽も格別です。人口や街の大きさの割に飲食店が多い所為か過当競争気味となっており、カラオケバーでたらふく飲んで歌っても新橋のヤキトリ屋なみの二千円か三千円で済むと言うので、つい二次会三次会と走ることが多くなります。

このようなことを書くと、クラス会是小樽でと言う声も出そうですが、東京からの往復運賃だけでも約五万円かかることをお忘れなく。

それにしても東京でのクラス会を懐かしく想っています。学校を卒業してからの暫くは学業の成績やら進学校などが気になる生臭い

時期で、同級生との交流も途絶えがちだったのですが、四十才を過ぎた頃からそれぞれの歩む道も定まり、卒業してからの時間経過も相俟って、好きだったとか嫌いだったとかも懐かしさの一部となつてカラリと乾燥した交友が出来るようになりましたね。とくに五十を過ぎた昨今ではお互に老ひの予感を抱く者同志として、会って話したり飲んだりするのが楽しみに

なつて来たようです。サラリーマンの人であればそろそろ親会社から子会社へ、役人であれば再就職の時機に差し掛つて来たわけで、これから尚更物淋しくなる季節ですから、学生時代に口を利かなかつた人でも旧友として交友を温め合いたいような人恋しい年配になったのでしょうか。

でも、学生時代に我々のマドンナだった人達はいつまでも変わりませんね。これは大先輩に聞いてみないと分かりませんが、僕達お互いに老人ホームに入る年頃になつても変わらないと思うのではないでしょう。何か。何故なら僕達の加齢相対速度はゼロだから……。

生来の感激屋で人とか土地とかに惚れっぽい性だから、当地での勤務が永くなると離れられなくなるそうです。

七十期の好漢と永遠の美女連に幸多かれと北の港から祈っています。

天命を知る

74期 藤原 經史

「光陰矢の如し」という言葉はまさに現代の今を、言い表わしているのではないか。時のたつのが速い。時代がそうさせているのか？ それとも宇宙の一秒一秒が年ごとに速くなっているのか？ どのような時にこそ「忙中閑有」で、心のおき処をどこにするのか、自己をどのように修めてゆくのか、きっちりとしたものを持ちたいものである。

過日、数年前の日本坂トンネル事故の判決が出た。日本道路公団側の維持管理の不備の責任を問われた結果になった。道路公団としても平素、道路の維持管理には充分の注意を払っている事と思う。突発事故が発生したその時の処理の仕方、せっかくの日頃の維持管理も水泡となってしまう。車がこれだけ多くなってしまうと、どんな優秀な設備、人材をあつめたとしても、ドライバーの一人一人の心の持ち方、すなわち自分を充分に維持管理していただかないと事故はなくなるならない。

日本の国もまさにそうである。「創業ト守成トイズレガ難キ」と唐の太宗が侍臣たちに問う話があります。

明治が近代日本の創業であれば大正、昭和が守成か……昭和二十年をもつて近代日本の再創業とすれば（この場合、日本人自らの手での創業ではなく、とりわけアメリカさんの援助の下での創業であるが……）今が守成の時代、すなわち維持管理の時代であります。その今はどうであらうか……。申すまでもない。さきほど述べた日本坂トンネル事故と同じである。

今こそ、現代を生きる我々として、守成、維持管理の重要性、大切さを充分に認識しなければならぬと思う。そのためには、国民一人一人が感謝する気持（特に創業時の苦勞をささえた先輩、先祖の人々に）、日本人が先祖から受けついでいる情緒、感情、さらには直観力のすばらしさを発揮し、日本国の維持管理に努力したいものである。まず自分の足もとを見る事によって、世界に貢献出来るものと思う。これが日本国民にとって天命を知ることか。

「駿河路」で感慨新たに

76期 鈴木 浩

月に一回程は、土曜日の休みを利用してゆっくり飲みに行くことにしていますが、先日は、新聞に出ていた静岡料理店なるお店を訪ねて、JR五反田駅近くまで行っていました。

板前、おかみ共に静岡市の出身とのこと、目立たない小さなお店ですが、駿河路の看板文字もなつかしく感じました。

ビールを注文して待っているとき出しにかつおの塩辛、そしてなつかしい焼津直送の黒はんぺん、焼いて、フライでと充分楽しんでまいりました。

静岡を離れてかれこれ三十年近くなるというのに、言葉のイントネーションがやはり静岡のものであるとの板前さんの話に、静岡との深いつながりを感じた一夜でした。

バーコード銀行員の

思い出

80期 A・A

静岡を卒業して早や四半世紀を過ぎた。その四半世紀を振り返りとりとめもない思い出話をさせていただく。

静岡時代の思い出は、野球とプールとポテトフライ。

野球は勿論高校野球、草薙球場には殆んど欠かさず応援に出かけた。在学中一度だけ甲子園に出場したが、残念ながらサマースクールで行けなかった。今も心残りである。

夏休みは毎日プールで過ごした。プール脇の跳び込み台の上で将棋をしたり……。

ポテトフライとは？その当時、定時制の学生の為にフライを売りに来ていた。そのフライのおいしいこと。ポテト、ハンペン等々。今も関東同窓会で黒ハンペンのフライが出る。その時がまさごと回顧される。

大学時代四年間は、麻雀・酒・パチンコで人生を謳歌。

最初二年間は麻雀とパチンコ、夕方になると「禁雀」の張り紙を剥がしながら四人で独身寮の麻雀ルームに集合。きたない毛布の上でチー・ボン、チー・ボン。外が白々と明るくなると何か胸に込み上げてくるものがある。誰かから言い出すでもなく、そろそろ止めようか、ということになる。まだ暗い廊下のトンネルの先から、この世のものとも言えない紫色の明かりが悔恨の情をより深くする。

後半二年間は四畳半一間のアパート暮らし。学校に行く時間も段々減るとともに、パチンコ・麻雀・酒の放蕩の日々。その頃の一番の自慢は六十八時間の不眠記録。大工の棟梁、自動車のセールスマン、アパートの隣室の学生と私。四人で延々とチー・ボン、チー・ボン。

銀行員になっても時々ヘマをして他人の世話になっている。銀行員になって間がない頃、職場の仲間での歓送迎会。私がコートも腕時計も置いたまま、ふと消えてしまった。皆で一晩中捜し回ったそうである。私はという山手線ぐるぐる回っていたらしい。気がついたら渋谷駅。あわてて最終電車で独身寮に辿り着いた。翌日出動すると、赤皆が眠そうな目をして「お前をブタ箱まで捜した」と言っている。私の爽やかな顔を覗んだ。

年月を少し飛ばして支店長時代のこと、順調な一年半を経過した後、トラブル発生。A氏の会社名義と個人名義の通帳に間違えて入金。詫言状を書け、マスコミに言うのと大騒ぎ。その騒ぎをおさめると同時に、次は得意先係の行員が不動産業者の商売を邪魔したとB不動産が喚び込み。パンツをぬいで「支店長、貴様、俺のケツを

取ってしろ！」と。完全な脅迫である。更に、上司に「君は銀行員に向いていない」と仕事の怠慢を叱られた若い行員が排ガス自殺。死線を彷徨う部下と二晩。とうとう心電図が横一文字になってしまった。

最近トラバリー（転職）が大流行。国際部門・証券部門の人間は外国証券からのヘッドハンティングの攻勢に晒されている。先日テレビでトラバリーの特集をしていた。トラバリーをする某女子社員が大きな声で叫んだ。「馬鹿野郎、バーコード課長！」その時、バーコードを連想させる真上から写された〇〇の頭。

私も四十才半ばである。

無錫旅情

80期 上出 和子

今年三月、初めて中国へ出掛けた。上海から蘇州無錫と汽車に乗り、暮れかかった車窓からの景色は行けども行けども皆同じ。畑や田んぼに子供の描くような家ばかり。暗い家の中は探電球がポツンとついているような明るさ。必要以上に電気をつけている日本とは大違い。でもそこには人間の暮らしがある。自家用車なんてないけれど、自家用自転車に乗って彼らは

どこへでも出掛ける。子供用腰掛なんてないけれど、上手に子供を自転車に乗せている。

電気洗濯機も電気冷蔵庫も高価でなかなか買えないけれど、太陽のめぐみを上手に利用して、道であらうと人目につこうと窓から外へ突き出すような彼等の洗濯物の干し方は確かに合理的な気がする。そしてお世辞にも贅沢とは言えない食事だけれど、ひどくまずい水を使わない工夫をした食物には美味しい物があり、成る程と思わせる生活の知恵がある。日常生活用品は工業もあまり発達しないせいか粗雑な品が多いが、伝統工芸品にはあの手先の器用さと根気ですばらしい物がある。

我々日本人は、日本と比較して、中国は物がなくて暗くてきたなくで厭だと思いがちだが、日本が日本人が失ってしまった物を中国は中国人は持っていると思うし、国情の違いで誤解している面が多くあると思う。その点では、この国に対しても同じだと思うが、日本の文化が中国の影響をどれだけ受けてきたのか分らないし、ましてや隣の大国なのだからもっとも理解するよう努力すべきだと思ふ。又色々な面で反省もさせられ、単なる観光とは違う感動を受けて

帰国した。

中国のほんの一部の感想を書いてみたのだが、皆さんにも是非中国へ行って我々の生活の見直しを

してみても良いのではないかと思います、僭越ながら、お勧めする次第です。

静岡だより

静岡・静岡定期戦

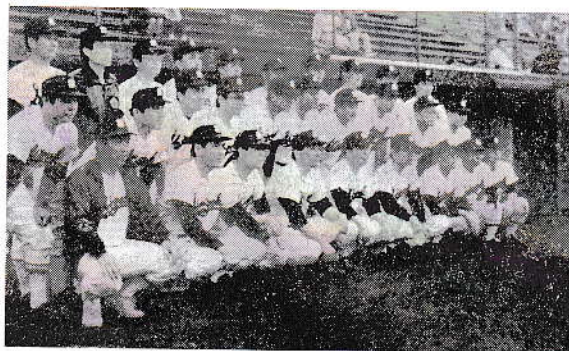
―静岡県高校野球の伝統の一戦―

第三十二回静岡高対静岡商の定期戦は、五月三日午後一時から草薙の静岡球場で約一万四千人の野球ファンを集めて行われた。

近年の静岡県高校野球界は定期戦はやり、お隣の清水市でも清水東高と清水商が、また東部地区でも富士宮西高対富士高がと、ここ数年でいくつかの定期戦がこの時期に行われるようになったが、途中の中断や試合自粛をも含めると六十年にも及ぶ歴史を持つ我々が定期戦は別格。プロ野球の公式戦をも上回る入場者を数えてのブレイボールとなった。

静岡は、春季高校野球の中部大会を制して久々の甲子園を狙い意気高々。一方の静岡は中部大会の三回戦で敗退、しかもエースの山崎が故障中―と静岡有利の下馬評

だった。試合は、静岡の先発山下が九回まで静岡打線を二安打に抑



(静岡野球部O・Bチーム)

昭和35年夏の全国進優勝投手石田勝広など甲子園出場者も多数。船川誠現監督の姿もあり、ファンの拍手を浴びた。

えれば、昨年まではライト兼任だった左腕投手も静岡に得点を与えぬ快投をみせ、0-0のまま延長戦に入った。

十回の表、静岡四番の杉山が、やや疲れの見え始めた山下のストリートの中堅越えに運び、山下をマウンドから引きずり降ろした。

静岡リリーフはエースの萩原。

対するバッターは五番牧野。昨年の秋季大会では一年生ながら四番を務め、中部大会で静岡とあつた試合では延長十二回裏に殊勲のサヨナラ安打を決めている。

牧野の頭にその時の思いがよみがえったか、的を絞っていたというストリートをたいて、センタースタートの一・オーバートの二塁打で一点目を七番八木も三遊間を破って二点目を入れた。その裏は勝利を確信した服部がきっちり三人で抑え、十奪三振の完封を飾った。

こうして定期戦は静岡のV4となり春の大会中部一位の静岡を封じたことで、夏へ向けての期待も大きくなった。

静岡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
静岡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

また「前座」のOB戦も、静岡OBが初回に三点、二回に四点を奪う猛攻を見せ、八一と静岡OB

Bに圧勝した。

こちらのヒーローは四番長沢。レギュラーではなかったが、昭和五七年の夏に甲子園へ歩を進めた経験を活かし、四打数三安打四打点の大暴れとなった。

静岡OB

3	4	0	0	1	0	0	0
0	1	0	0	0	0	0	0
1	8						

静岡OB

(85期 吉水 広)

バスケットたちの青春記

静岡バスケット部が今年、創部五〇周年を迎え、一月二日母校同窓会館で記念式典を行い、合わせて記念誌「バスケットたちの青春記」を発行した。

記念事業の準備は約一年前から静岡在住のOB・OGが中心となつてスタートした。メンバーは創部当時の森正氏(60期)から静大生の佐野吉美さん(102期)までの約三〇人。最初、大先輩たちの前にかたくなっていた若手も、準備会や準備会と称した酒席(森本直生氏(84期)が経営する居酒屋「談楽」)が重なるにつれ、意気投合。式典を一週間後に控えた十二月最後の準備会は、77期の牧野彰夫氏のお宅で、牧野氏が作ったおで

んをつまみながら夜遅くまでかかった。出来上がったばかりの記念誌の袋詰め。お世話になった歴代の先生への感謝状の準備……。一年かけてやってきた準備作業ももうこれで終わりかと思うと、ほつとする反面、このまま終りたくないという気持になった。「つまんなくなっちゃいますね」と静大の岸洋子さん(102期)。

一月二日の記念式典。村上春水



平成二年一月二日
バスケット部創部50周年記念式典

先生、馬渡猛先生、鈴木明徴先生（72期）、豊田一男先生や歴代の顧問創部メンバーの時田貞明氏（57期）から現役男女にいたる約二〇〇人の部員が同窓会館に集った。静岡、清水東、市高、静岡精華、城北高校のOB・OGもお祝いにかけつけてくれた。

本内貴史会長（75期）の挨拶のあと、今は亡き床並繁先生（初代顧問）をはじめとする顧問の先生方に感謝状を贈呈し、その後戦前戦後の動乱期に部活を盛り上げてくれた64期から68期の方々の思い出話が紹介された。

このほか、参加者全員に記念誌「バスケットの青春記」が手渡された。記念誌は一四三人のOB・OGと五三人の現役選手が砂ぼこりのグラウンドや旧体育館、新体育館でボールを追いかけた思い出の手記で綴られていて、それぞれの時代背景の中で、先生と生徒が必死に部活に打ち込んだ姿が浮き彫りにされている。

静岡バスケット五〇年を振り返る時、いつの時代にあっても、歴代顧問の先生が真剣に私たちを指導し続けてくれたことがバスケット部にとってどれほど貴重な財産であるか、痛切に感じた。

（86期 殿岡祐規）

東京在住静岡県人会

新理事長に名波氏

空席となっていた東京在住の静岡県人会（八木勇平会長、東急建設会長、会員八百五十人）の理事長に弁護士の名波倉四郎氏（64期）が就任した。七月に行われる県人会総会で報告される。名波氏は「交通の発達でふるさとが近くなり、静岡県人会としての意識が薄れがちで新規加入も少なくなりました。今後どうするか検討していきたい」と述べた。

前理事長の和久田三郎氏（元大関天竜）が亡くなった後、理事長は空席となっていたが、三月に開かれた常任理事会で正式に名波氏が新理事長に選ばれた。

名波氏は静岡高、中央大を経て弁護士。現在、東京三弁護士会会館建設合同委員会委員長、東京地裁調停委員などを務めている。

今回、新しく理事長を補佐する副理事長として東急建設副社長川田昭氏（59期）が横濱市在住、藤枝市出身、十二社連座熊野神社福宜田代賀次氏、新宿区在住、榛原郡金谷町出身の二人を選んだ。県人会事務局は東京都中央区銀座八ノ三ノ七八電03（571）67

11

（静岡新聞三月十七日朝刊より転載）

江の島会

第43回「江の島会」ご案内

一、日時 九月二日（日）正午開会

一、場所 江の島恵比寿屋旅館（35期永野清氏経営）

一、会費 八千円 女性六千円

（記念写真代等を含む）

年会費不要

一、連絡先 江の島会事務局（四五（30）五五四五）

（59期奥沢 勝山塗装内）

一、追記

今回は恵比寿屋旅館新装開店後初めての会合ですので、遠近を問わず、多数のご参加をお待ちしております。

▼お願い▲

一、この会報についてご意見・ご希望をぜひお寄せください。

一、同期会報告、回想・随想・詩歌など、会報の原稿をどしどしお送りください。（15字詰めで）

一、年会費二千元未納の方は、同封の振替用紙でよろしくお願いいたします。

「こえ」

気軽に筆を執ってお送りください

（前号未掲載分）

よろしく願います。

70 佐々木政之

前回の総会は残念ながら欠席しました。次回には必ず出席したいと思っています。よろしく。

70 北村 孝

案の定、北の国へ流罪となり、初めての冬を迎えようとしています。南国育ちの小生には見ること聞くこと物珍しいことばかりです

妻 喜久代

46 久留 武

が、関東支部の会誌にあった71期の浦田氏の「北の国から」に共感を覚えました。生来惚れっぽい性なので北海道が大好きになりそうです。

48 奥山 正

年々同輩が少なくなって行くのは淋しい事です。名前を残した方々は立派ですが、陰で立派な方々も沢山居られます。陰の一人になれるよう残り少ない人生を暮し度く思っています。無理な健康法は却って不可。自然が一番良いと自分分は思っています。

77 仁科 光司

年一回の同窓会、必ず出席していますが、パターン同一でマンネリ。幹事は大変ですが、目先をかねてみなければ。競馬場で馬券を買いたがら歓談等いかが。

71 青木庄二郎

八年振りでニューヨークより帰って来ました。以後よろしくお願い申し上げます。

71 青木 道芳

新規に入ることになりましたが

50 佐野三樹雄

一月六日、同期の加藤博君の葬儀に伊藤、太田、佐々木、原崎、伏見の諸君とともに参列し、永の別れを致しました。生前の彼の各方面における活躍を偲び、ご冥福を祈りました。

48 福永 正美

粗大ゴミにはなつて居りませんから御安心下さい。

51 佐伯 正剛

今年も早や立春を過ぎ、またまたバレンタインデーとやら、賑かな若者の街の姿を迎えています。役員幹事の皆様、いつもながら何かと御苦勞な毎日と推察します。

小生もどうやら健康を回復、同級生を始め日頃御世話になっている皆様にお返しに心算で過しています。

53 松前新太郎

毎日山歩きや下手なテニスなど運動第一の生活を送っています。

56 伊東 卓爾

退職後の時間講師も三年で再定年になる。四月から新しい仕事をしなくてはならないが、目下、現職に全力投球中。年金生活者にはきつい世の中、折から、総選挙の投票寸前。なんとか安心して、天寿を全うできる政治の出現を望んでいる。

諸賢の健康を祈る。

56 清水 逸郎

同窓会のことではいつも有難うございます。会費の納入がおくれて申しわけありません。

会報をいつも楽しみにしておりますが、昨年夏はヨーロッパ出張で総会に出席できませんでした。

お手数でも会報27号をお送りいただけましたら幸甚に存じます。

58 田熊 博邦

同窓生名簿中小生勤務先は已に退職しておりますので末消方願います。他の同僚についても大分變動している事と思しますので確認して下さい。

58 猪瀬 忠賀

新しい名簿ありがとうございます。五十人もの「同期の桜」がこの関東の地で活躍していることを知り、心強い限りです。かつての紅顔の美少年たちも今や六十五歳。それぞれの来し方を想い、感無量のことでしょう。人生まだまだ、お互い頑張っていきたいものです。

58 岩本 忠吉

会員名簿拜受。ご苦勞さまです。切角作るのでしたら、調査用のハガキで事前に確認取っていた方が良かったと思いました。我々の同期はリタイヤ年代になりましたので。

61 浅野 徹治

昨秋、同じ西汽車通で在京の同期、安原徹治君と佐野剛君の三人で一杯やりました。

仕事の面では奥野泰助君、黒川泰三君に御世話になってゐます。

62・63 高橋 孝雄

平成元年三月二十九日急逝致しました。

生前はいろいろお世話様になりました。

まして有難うございました。

妻 泰子

62・63 遠藤 良司

会報をお届けされました有難う御座居ます。戦後のドサクサと荒廃の裡に卒業した吾々も、全員が満六十才となりました。まだまだ鼻垂れ小僧です。

海兵七十八期の仲間とは最も頻繁に会合を持って居りますが、静中の会も次第に盛んになる事でしょう。

64 井戸 良輔

ご無沙汰で申訳ありません。昨年6月菱和調温工業(株)常務(3期6年)を退任し、同9月から三菱各社と関係深い神戸田ゴルフクラブの社長室長に就任し、長竹カントリークラブに勤務しております。目下見習中。勤務先は左記です。220-02 神奈川県津久井郡津久井町長竹1838 TEL(0427)84-11969 長竹カントリークラブ

64・65 山本 光夫

1月11日ホテルニュー神田をリタイヤしましたのでお知らせ致します。

67 山形 誠

5月下旬よりJICAの長期専門家として2年間シンガポールへ赴任の予定です。

70 河井 良夫

松坂屋東京本社勤務を続けております。

銀座にお立寄りの節はどうぞお声をかけて下さい。昔がとて懐かしく思える年頃になったように感じられます。

70 牧野 甫

東京の住所変更になりましたが相変わらず大阪へ単身赴任を続けております。夏こそ静岡の甲子園出場を期待しております。

71 竹井三保子

そうでない期生もあるけれど、女性をまとめて後にくっつけるような名ボが續くかぎり、出席したくないと思う。ずっとがまんしていましたが、意識していても、してなくても、静岡生の男社会の壁は許しがたいものでした。いかがでしょう？

73 林 さち子

本年度中に関西に転居いたしますので、関東同窓会を退会いたします。よろしくお取計らい下さい。

74 野々田 梨

東京に移り住んで20余年が過ぎ静高とも余り縁がなくなりました

建築設計・監理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成 岡 英 彦 (67期)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル
TEL 03-363-8604 (代表)

株式会社 富 士 越
株式会社 富 士 越 化 成

代表取締役 野 澤 正 憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9

TEL(409)3342(代)
TEL(400)9541(代)

が、何かの機会に静高の先輩・後輩であることがわかったと急に話はずみ、百年来の知己であるような感じになるのは不思議です。会のみますますの御発展を祈ります。

74 木村 敦

自動車会社(ホンダ)に勤めて二十七年。「企業の活力」や「組織のダイナミズム」の研究にとり組んでいます。

同窓会の方々と同じ領域に関心のある方同志で飲んでみたいものです。ご連絡下さい。

94 柏 寿子

非常勤講師として大学でドイツ語を教えています。

平成元年度会費拠出者

(順不同・敬称略)

平成元年12月1日～2年3月31日

期別

二八 森綱平

三一 塚田英夫

三二 前田鉄三

三四 嘉悦一郎

三五 永野清、畔柳安雄

三八 永嶺忠雄

四〇 野崎操一、杉本四朗

四一 中村安時

四二 内田正夫

四三 吉江誠一、柳沢保雄、松下篤三

四四 臼井茂、村井東助、中村満夫

四六 青木清明、大島正雄、内山規、篠原清、久留武、磯塚倫三

四八 鍋田親一、松岡喜郎、奥山正、福永正美

四九 植木定美

五〇 浅賀博澄、大庭左文、益田竜也、佐野三樹雄

五一 田中賢一、鈴木孝雄、河瀬士郎、佐伯正剛

五二 西田豊馬、勝又良男、相島秀夫

五三 稲畑勝(3)、宮沢四郎、松前新太郎、野崎昌輔、手島正一、田辺信次

五四 居初良雄

五五 塚越修

五六 中村治郎、石塚由雄、伊東卓爾、清水逸郎、松田光彦

五七 原川久雄、天野喜久雄、山中孝二

五八 島村悟、田熊博邦、萩原義臣、須山静夫、猪瀬忠賀、岩本忠吉

五九 内田武男、磯部一、長谷川邦三、狩野和男

六〇 服部昌夫、井田淳(3)、井出裕雄、山本善通、山本正三、野沢栄司

六一 浅野徹治、土井正園、仲野辰男、清水四郎、鈴木孝、伊藤久、安原徹治、稲森慎二、長瀬脩

六二 六三 海野昭平、川手生己也(3)、真田宗明、塩沢敬、加藤平三郎、鈴木新之輔、大庭陽三、稲森茂、柴田克朗、高橋孝雄、三枝弘之(3)、鈴木市三、大塩幸男、遠藤良司

六四 六五 小林剛、井戸良輔(3)、山本光夫、竹内豊、杉本哲(3)、望月坦

六六 杉本幸貞、小林五郎、小嶋清司、加藤昭、菊田聡裕、高橋宏、馬淵逸明、大坪信之、原常勝、山梨裕司、原野谷朋司、早見幸雄、前田和彦、石川創二、大村敏夫、山本俊夫、武藤勇、尾入泰彦

六七 朝倉勇、河口正義、角田栄一、土屋博、戸塚惣雄、児島英男、小杉謙一、山形誠向井久和(4)

六八 塚本浩司、大場正己、佐藤忠行、横山富士夫、斎藤武井口禎、河口浩、植田勇夫、長谷山剛、鈴木国功、鈴木満郎、小林功典

六九 八木義弘

七〇 松浦洋一郎、原田行造、小

七二 種茂雅之、石田駿一郎、花田守弘、木村克彦、丸山安彦、石川正明

七三 間淵啓子、岡本修、大石堯史、君島武男、塩坂雅司、鈴木智彦、深沢靖男、佐々木勝彦、林さち子、遠山敦子、山本健史(3)

七四 見城尚志、両角友靖、野々田昶(5)、山本肇、中西健角谷治子、石上省三、田中佐智子、内山明夫、佐野捷造、木村敦

七七 山崎通之助、佐藤昌男、岡本天晴、磯谷計喜、遠又英祐、岡村稔、宇野明彦、小林陽一

七八 桜井晴夫

八七 平松裕

九二 大塚全里子、安本修身、及川貴子、石川雄一、鈴木育也、岡村仁、柏寿子

九四 船橋智

一〇〇

山清蔵、大山祐司、吉田修賀知進、河井良夫、松井昌夫、坂本康、牧野甫

池本徹、望月祐言、石上惟啓、遠藤幸男、片山嘉博、竹井三保子、渡辺弘、金子雅彦、林洋右、谷口滋、笠井克彦、稲葉庄二、松原徳満、岩崎謙一郎、岩崎剛(3)

七二 種茂雅之、石田駿一郎、花田守弘、木村克彦、丸山安彦、石川正明

七三 間淵啓子、岡本修、大石堯史、君島武男、塩坂雅司、鈴木智彦、深沢靖男、佐々木勝彦、林さち子、遠山敦子、山本健史(3)

七四 見城尚志、両角友靖、野々田昶(5)、山本肇、中西健角谷治子、石上省三、田中佐智子、内山明夫、佐野捷造、木村敦

七七 山崎通之助、佐藤昌男、岡本天晴、磯谷計喜、遠又英祐、岡村稔、宇野明彦、小林陽一

七八 桜井晴夫

八七 平松裕

九二 大塚全里子、安本修身、及川貴子、石川雄一、鈴木育也、岡村仁、柏寿子

九四 船橋智

一〇〇

国際線航空貨物・海外旅客取扱い
運輸大臣登録旅行業代理店業3440号

株式会社フジ・ワールド・エンタープライズ

代表取締役 中馬敏雄 (70期)

〒105 東京都港区浜松町2-8-9 春原浜松町ビル

貨物電話 434-0591 (代)

旅客電話 437-5861 (代)

FAX 434-5537

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱 函 病 院

院長 小坂 博 (67期)

住所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴木 与平 (44期)

清水市入船町11-1
Tel 0543 (53) 3111 (大代表)
東京支社 千代田区丸の内2-3-2 郵船ビル4F
Tel 03 (284) 0551 (代)

トッパン・ムーア株式会社

取締役会長 宮澤 次郎 (42期)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原 由三 (67期)

東京都中央区八丁堀2-1-7 神鋼ビル
TEL 03-553-8981 (代表)

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩波 信平 (42期)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井 平一郎 (57期)

本 社 静岡市国吉田645
TEL 0542(62)1111 (代)
東 京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03(272)4651 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役 奥澤 徹 (59期)

本社工場 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6 〒246
Tel 045-301-5545 FAX 045-301-5547
大和工場 大和市深見3706-1 〒242
Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343
東松山工場 東松山市大字新郷88-47 〒355
Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

建築コンサルタント・設計施行业務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥野 孝 (53期)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-834-5331 (代表)

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野 孝 (53期)

取締役社長 奥野 進 (56期)

取締役副社長 奥野 広 (58期)

本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
Tel 03-842-6831 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2-8-14
Tel 0542-46-9378

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈 正三 (67期)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03-254-2171 (代表)